

文芸作品 中学生

◆最優秀賞

五島市立富江中学校三年（長崎県五島市）

川本 香純

共に頑張る

「認知症になったらどうなるのだろうか？」と私は認知症という単語に触れる度考えていた。

先日、認知症サポーター講座を受け、認知症は新しい記憶からなくなっていくのだと判明した。それはタイムスリップを経験するようなものだと思えていたが、その内家族のことも忘れてしまうのは本人にしか分からない苦痛だと思

う。

後日介護職員として働く母に認知症について尋ねた。「認知症って大変？」と漠然とした質問だったが、母は丁寧に答えてくれた。「食べたことを忘れる人」「夜中に何度も起きて動きまわる人」など様々な人がいるそうだった。これらの人を講座の内容にあてはめていくと、認知症の症状であると分かった。対策については、鍵をかけて行動を制限することはできず、話を合わせて誘導をすることが基本だと教えてくれた。最後に再度認知症は大変なのかと質問をする

と、
「大変だけど、一番辛いのはその人だから」と言われ、自分が少し恥ずかしくなった。

母の話の基に、認知症の人に対して自分ができることは心のケアだ。病は気からという言葉があるように、心が沈んでいては、症状の悪化も早まるらしい。そうならないためには、周囲の協力が必要不可欠だ。勿論、あからさまにとい

うわけではなく、さりげなくということが大切だ。

次に、社会ができることは関心を持つことだ。認知症は目に見えて分かるものではない。マタニティマークのように、自分が認知症であるというマークをつけるのは気が引ける。だからこそ、関心を持ち、優しく対応ができるようになれば、誰もが安心できる社会になると思う。現在は各地で認知症についての講座が行われていたり、インターネットを使い調べることができる。難しいことだと考えず関心を持つことをしてほしい。

認知症になれば、恐らく家族も、好きだったことも忘れてしまうだろう。しかし、私は何故かそれを怖いとは思わない。

これから、更に認知症について掘り下げ、それらを発信していきたい。「頑張れ」ではなく、「共に頑張れる」社会をつくっていききたい。